

Junior Red Cross Information



2013

特集 東日本大震災後の防災・減災教育



2013

Junior Red Cross Information



東日本大震災から2年半。

私たちはいま、あの経験から学んだことを実践し、深めるべき時に来ています。

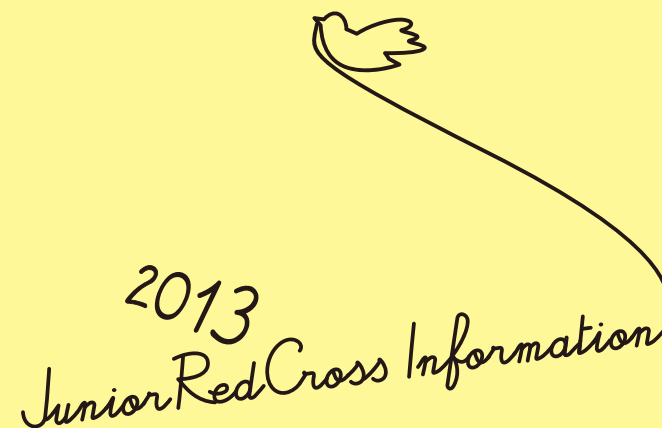
震災当時、青少年赤十字の活動を通じて学んできた子どもたちの

“気づき・考え・実行する”精神は被災地でどう発揮されたのか。

さらに、私たちが取り組むべき今後の“防災・減災教育”についても当事者たちの証言から探ります。

CONTENTS

- 特集
3 東日本大震災後の
防災・減災教育
- 4 3月11日。その日、子どもたちは
地域を支える力になった
宮城県 仙台市立榴岡小学校
- 6 学校とは、今しかできないことを
実現するところ
福島県 いわき市立久之浜第一小学校
- 8 私たちの防災・減災
- 10 戦いの中にもルールがあるのを知っていますか？
- 12 1円玉募金による教育等支援事業
- 14 世界のJRCメンバーと国際交流
- 16 When I was a child
宇宙飛行士 野口聡一さんインタビュー
- 18 日本縦断！活動紹介
- 22 青少年赤十字(JRC)とは
- 23 Operation Vista reunion



2013.9.1 No.162

青少年赤十字指導情報

COVER-1: Fukushima



福島県 いわき市立久之浜第一小学校
佐藤綾佳先生、鈴木健太君

養護教諭の佐藤綾佳先生は、誰よりも早く学校に
来て、その日の校内の放射線量をくまなく歩いて
測ります。先生の毎朝の努力があるから、子どもた
ちものびのびできているんですね。鈴木健太君は
ちょっと恥ずかしがり屋の三年生。避難先から、毎
日元気に学校に通っています。

よき「一社会人」をめざして

青少年赤十字(JRC)に携わっておられる
全国の幼稚園、保育所、小学校、中学校、高等学校、
特別支援学校の先生方、常日頃の指導に感謝を申し上げます。
私たちが実践しておりますJRC活動は、
「生きる力」という言葉に集約できるものです。
「生きる力」の育成は、日々の体験や活動を通し、
自らが「気づき、考え、実行する」ことによって
真に身につくものであると思います。
2011年3月11日の東日本大震災以来、
全国の学校で防災教育の必要性が再確認されています。
21世紀を担う子どもたちの命を保障するためにも、
子どもたち自身の危機回避能力を育成するためにも
防災教育はなくてはならないものです。
JRCの幅広いプログラムを通し、
子どもたちの限らない夢とその実現を支援するとともに、
子どもたちが将来よき「一社会人」として活躍することを
心より願っております。

青少年赤十字全国指導者協議会 会長 中村 正



避難所の炊き出しを手伝う榴岡小学校の子どもたち。子どもたちの笑顔にほっとしたと語る被災者も多かった。

©朝日新聞社

3月11日。
その日、
子どもたちは
地域を支える
力になった

宮城県

つじがおか
仙台市立榴岡小学校

東日本大震災による被害を目の当たりにしながらも
“自分たちにはできることはなにか”と考え、ボランティア活動を行った
榴岡小学校の子どもたち。
他者を思いやり、実行に移す自主性が
子どもたちに備わっていた理由とは。

帰宅困難者が次々と学校へ

2011年3月11日。寒い日だった。1年間お世話になった地域の方々への感謝の会が終わり、下校準備を進めていた14時46分大地震が発生した。机は動き、電話や書籍がばらばらと床に落ちた。大きな揺れで、何かにしがみついていたと立ってさえいられない。揺れが一瞬収まった隙に校内放送をかけようとして、停電に気づく。非常用放送設備を使い、指示を出した。児童たちを校庭に避難させる。幸い、全員が無事だった。

仙台市宮城野区の榴岡小学校はJR仙台駅近くに位置する。駅舎倒壊の危険が

自ら進んで 避難所の手伝いをした 子どもたち

11日以降、学校は一時休校の措置をとった。しかし早くも15日には、被災者のために動き始めた子どもたちの姿があった。JRC委員会の子どもたちが中心となり、地域の大人とともに避難所でのボランティア活動を行ったのだ。



子どもたちは、自分たちで企画書（V.S.ノート）を作り、アイデアを発信する。地域のための街頭募金もそのひとつだ。

きた。地区の社会福祉協議会と連携する「ふれあいいきいきサロン」事業では、地域在住のお年寄りを学校に招いて交流する。一緒に給食を食べたり、みんなで握手をしたり……。何気ないふれあいだが、こういった機会に恵まれていたからこそ、非常時においても子どもたちは他者を気づかう心を育めたのだろう。

「仲良くなったおじいちゃん、おばあちゃん、元気かな」。子どもたちひとりひとりがこう思うだけで、どれほど地域は豊かになるだろうか。

「震災時、子どもたちは冷静でした。人のために役に立ちたいという気持ちで、彼らを突き動かすエネルギーになっていました。ここまでの成長を促すには、学校での総合的な指導はもちろん、教師のみならず地域や家庭の大人たちによる、子どもたちへの「確信づけ」も必要です。具体的には、褒めること、認めること。正しいことを実行するのは良いことなんだ」という確信を、実体験を通して子供たちに持つってもらうことです」。

東日本大震災以後、榴岡小学校におけるJRC活動はより深められている。地域を明るくする「あいさつ運動」や「おそくボランティア」、「街頭募金」といった活動は、すべて児童自身の企画書（V.S.ノート）がもととなって実現したものだ。地元の商店や町内会の方々も活動のために場所を提供するなど、協力を惜しまない。久能さんは続ける。

「学校は、最強の防災の拠点です。地域に向かって開かれた学校づくりを通し、子どもたちは地域とともに育ち、また、地域も子供たちとともに育っていくのです」。

「避難所のお手伝いをしてもいいですかと、子どもたちは提案してきました。誰に指導されたわけでもない、自主的にです」。こう話すのは、当時榴岡小学校の校長を務めていた久能和夫さんだ。子どもたちは進んで避難所で炊き出しの手伝いを始めた。赤十字奉仕団の大人たちから借りた赤十字マークのエプロンを身に付けてた彼らは、とても誇らしそうだ。

「目の前の課題への対処に追われ、余裕などなかった私たち大人よりも、子どもたちのほうがずっと、自分たちにできることはなにか」と真剣に考えていたのかもしれない」。

榴岡小学校は大正13年からJRCに加盟している。児童たちからなるJRC委員会が中心となって、1円玉募金やベクトルキャップの回収、月に一度の「JRC新聞」の発行などを日常的に行って



榴岡小学校のJRC委員会が毎月発行する「JRC新聞」。活動を目に見える形にし、発表することで表現力や論理性を養うことにもつながる。



地域と一体となり、 学校を最強の防災拠点に

また、震災以前から、榴岡小学校では地域とかかわるための活動を幅広く行っ



久能 和夫
Kuno Kazuo

1952年、福島県生まれ。仙台大学体育学部教授。2007年4月～2013年3月まで榴岡小学校で校長を務めた。東日本大震災時には、指定避難所である榴岡小学校の責任者として奔走した。

学校とは、 今しか できないことを 実現するところ

福島県

いわき市立久之浜第一小学校

原発事故の影響を受け、一時、
移転していた久之浜第一小学校。
事故後半年して学校を再開し、
以前の環境を取り戻すための努力を
現在も続けている。
子どもたちが
生まれ育った地域で生きる意義とは。

原発事故がうばった “当たり前”の日常

いわき市北東部に位置する久之浜町は、海沿いの風光明媚な土地だ。近海沿岸漁業が盛んで港町として栄えてきたが、東日本大震災とそれに関連する福島第一原発事故が町の人々の生活を一変させてしまった。

2011年3月12日の18時25分時点で、政府は福島第一原発から半径20キロメートル圏内の退避指示を発令していた。久之浜町は30キロメートル圏内にあたる。翌13日、いわき市は独自の判断で久之浜地区住民にも自主避難を要請。緊急輸送バスを運行させて避難移動を開始した。久之浜第一小学校は避難要請を受け、いわき市内にある別の学校の校舎を借

りる形で学習を進めた。松本光司校長は話す。「会議室や集会室を提供してもらい、そこをさらに間仕切りして勉強しました。子どもたちは明るく過ごしてはいましたが、通常ではない環境でのストレスは大きかったと思います。体調不良を訴えて保健室に行く子どもの数がいつもよりもずっと多く、日常を取り戻す必要性を強く感じました。」

子どもたちが、家庭を、 地域を変えていく

2011年10月11日、松本校長は久之浜第一小学校での授業を再開した。国が指定した避難・退避区域内にある学校とし

れている子もいるんです。」

久之浜第一小学校に戻ってきた子どもたちの願いはとてもシンプルなものだ。「前と同じように、みんなと一緒に勉強がしたい。いつもと同じように遊びたい」。学校はそんな子どもたちの思いを受け止める役目を負っている、と松本校長は言う。

「子どもたちが『今日、学校楽しかったよ!』と家庭で言えば、それを聞いた両親が笑顔になる。『うちの子が、学校でこんなことしてきて、楽しかったよ』と職場で話せば、大人たちも元気になる。子どもが明るくなれば家庭が明るくなり、職場が明るくなり、地域が明るくなって、久之浜が、そして福島が明るくなっていくんです。」

学校を起点に、地域を変えていく。久之浜第一小学校が再開すると、近隣のお年寄りたちが子どもたちの姿を見るためだけに学校を訪れることもあったという。「子どもたちがはしゃぐ声を耳にすると元気が出るんだよ、とおじいちゃんおばあちゃんと言ってくれるんですよ。子どもが生まれ育った町にいるということが、地域に力をつけさせるんですね。」

子どもたちの安全を守るための、 たゆまぬ努力

学校再開から2年近くが経とうとしている。今でも毎朝、一時間かけて校内の放射線量を隅々まで測り、その数値を保護者にメールで連絡している。子どもの安全を守り、地域を守るためには、学校側は

では、もつとも早い再開だった。PTAのメンバーや地域の方々とも力を合わせ、半年かけて学校内の整備と除染作業を行った末の決断だ。学校の安全性を数値的にも証明し、子どもたちが母校に戻ってこられる環境を整えた。

「子どもたちには、ここに戻るという選択肢のほかに、違う学校に行くという選択肢もありました。久之浜から居を移し、別の土地で避難生活を送っている家庭もありますから、新しい学校に転校するという方法もあるのです。11年度は久之浜第一小学校には232名の児童が在籍予定でしたが、11年4月6日に150名でスタートし、10月11日の時点で191名までに戻りました。そのうち何名かは、学校から離れた場所に現在の自宅があります。早朝、6時40分にスクールバスに乗り、片道1時間半もかけて久之浜に通ってく

これからもこうした細やかな努力を続けていく必要がある。久之浜第一小学校ではホールボディカウンタ―や甲状腺検査を率先して行い、子どもたちへの被害がないことを実証し、保護者からも納得を得ているという。

「私たちにとっては、原発事故後に始まった闘いはずっと続いています。この状況に負けてはいけません。『できない』とあきらめるのではなく、『できる』に変えることが必要なんです。芋ほりだって、七夕の笹飾りだって、プールでの水遊びだって、知恵を絞ればできる。家庭で育てた野菜を食べることはできませんが、違う土地の農家にお手伝いに行けば、芋ほり体験はできる。笹飾りの笹も、遠方から取り寄せればできる。プールは除染すれば問題ありません。今しかできないことを子どもたちにさせてあげるのが、学校の最大の役割なんです。」

子どもたちが考える “防災緑地”

東日本大震災の津波被害で、久之浜地区では51名が犠牲になった。津波被害を抑えるために、住宅街跡地に防災緑地を整備する計画が進められている。久之浜第一小学校の5・6年生も「総合的な学習」の時間に防災緑地にまつわるアイデアをまとめた。どんな木を植えれば津波の勢いを弱められるのかなど、自分たちで調べ、学んだ成果を行政や大人に提案する。今後「総合的な学習」では、5年生は地元の漁業について学び、6年生は街づくりを考える予定だ。



松本光司
Matsumoto Koji

1958年、福島県生まれ。2011年8月より久之浜第一小学校校長。「子どもたちは、復興に向かう大人たちに力を与えています。学校は地域と一緒に歩むもの、と再認識しました。」



昇降口に設置された防災ヘルメット。



校庭には大きな空間放射線量測定器が設置され、放射線量が一目でわかるようになっている。保護者へは毎朝9時にその日の放射線量をメールで送信している。



私たちの防災・減災

東日本大震災を受けて、被災地以外の地域でも防災・減災教育が行われ始めている。

JRCの活動を生かした児童生徒たちによる研究発表をはじめ、

地域の住民とともに一体となって進める防災講座や、イベントなど。

各校独自の取り組みとその成果から、防災・減災教育がもたらす発展的な影響を考える。

JRCは、 防災教育に注力 していきます。

東日本大震災を機に、防災意識の向上が求められています。しかし、教育現場における具体的な取り組みは必ずしも進んでいないのが現状です。JRCではこれまでに培ってきた指導方法や人的資源を活用し、防災教育についての体系的な枠組みを作成して防災教育の充実発展に寄与したいと考えています。

JRCの加盟校数は、日本の全学校数のおよそ3割に当たります。加盟校での防災教育が盛んになれば、加盟校のメンバーのみならず、地域社会や家庭における防災意識の向上が期待され、防災文化の構築に資することができるはずです。

JRC加盟校のメンバーが、自らと他者の命を守る力を身につけること。

JRC加盟校のメンバーが、災害に関する知識を正しく理解し、地域の奉仕団などとも連携することによって、地域住民や家庭における防災意識の向上を図ること。

こういったことを目標に、JRCでは学習プログラムや教材を開発するほか、人材の育成にも注力していきます。

高知市立 潮江中学校

防災教育を通して 学校を活性化

高知県が'05年に発表した地震予測によると、マグニチュード8.4の地震が起きた場合、高知市潮江地区はおよそ0.75メートル



生徒たちが、防災を呼びかけるため防火扉に絵を描いた。防災教育は生徒たちの積極性を高めている。

ル地盤沈下し、1メートル以上浸水するとされている。この予測や東日本大震災を受け、潮江中学校では'11年6月より防災教育を学習の柱に設定した。

「いずれ来る南海地震に備えるためにはもちろん、命を守る防災教育を推し進めることで生徒自身が考える力を伸ばし、自主性を育む目的もあります」と坂本昌二教頭は言う。生徒たちは地震や津波の対策を調査し、一枚のポスターにまとめた。学習の成果を地域の小学校で発表する「出前授業」を行うと、防災というテーマを通して、年下の子どもたちとの間に前向きな関わりが生まれた。中学生の心に少しずつ責任感が育まれていく。

「実は、潮江中学校は生徒指導の面でも課題の多い学校でした。地域の中でいいイメージを持たれていない時期もあったんです。しかし、防災教育に取り組むようになって、生徒も学校もどんどん変わってきました」。

防災を学ぶにつれ、自発的にアイデアを出せるようになった。はじめ防災倉庫は運動場に設置されていたが、これについて「津波が来れば水没するかもしれない。高台に移動さ

JRC部の生徒たち による防災展示

山口県立 高森高等学校

高森高校にはJRC部がある。現在部員は9名。少人数ながら、JRCの活動を全校生徒に知ってもらうため日々活動している。'12年9月の文化祭で、JRC部では防災意識を高めるための展示を行った。指導を行った河村美穂先生はこう話す。

栃木県立 学悠館高等学校

JRC部発案の 防災講座を実施

学悠館高校の防災講座への取り組みは、'07年に始まった。学校に掲げられた「指定避難所」というプレートを指して、あるJRC部員の生徒が「先生、避難所になった時学校はどうなるの?」と疑問を呈したことがきっかけだった。

「正直に申し上げて、わが校での防災意識はまだまだ高いとは言えません。被災地から離れた西日本では、ともすれば東日本大震災の記憶が遠くなりがちです。これに問題意識を感じたJRC部員たちの発案で、展示を行いました」。

少しでも多くの生徒たちに興味を持ってもらいたいと、部員たちはアンケート調査を行ったり、クイズを作成するなど工夫を凝らした。

「防災に無関心だった生徒たちにも注意を促すひとつのきっかけになりました。わが校の生徒は大きな災害に見舞われていない世代ですので、非常にのんびりしています。この土地が安全だと信じているところもあるでしょう。しかしずっとここで暮らすと

「東日本大震災以前の災害には無頓着な日常の中で、教師も含め誰もが一般的な知識しか持ち合わせていませんでした。そこでJRC部の活動のなかで、避難所というものがどういうものか、考えてみようという生徒が提案しました」と部の顧問である大島喜美子先生は話す。学校祭での発表などから始めた活動は、次第に地域との連携を強めていった。現在では5歳の子どもから90歳代のお年寄りまで、地域の方々80名以上が参加する防災講座をJRC部主催で定期的に開くまでに成長している。

「防災講座では、非常炊き出しの体験や仕切りのない中で眠るシミュレーションなどを行います。みんなで見出し合いながら、災害時のイメージトレーニングをす



学校の正面入り口には、防災啓発のパネルを設置。地域に向け注意喚起している。



JRC部は文化祭で発表展示を行い、校内の防災への意識を高めた。



学校が中心となり、地域の方々と関わりながら防災講座を定期的に行う。

言い切れるわけでもなく、一生のうちどこかで災害に遭う可能性もあります。そのためには危機意識をもって本格的に防災教育に取り組むべきだという課題が見えてきました。今後も活動を続けます」。

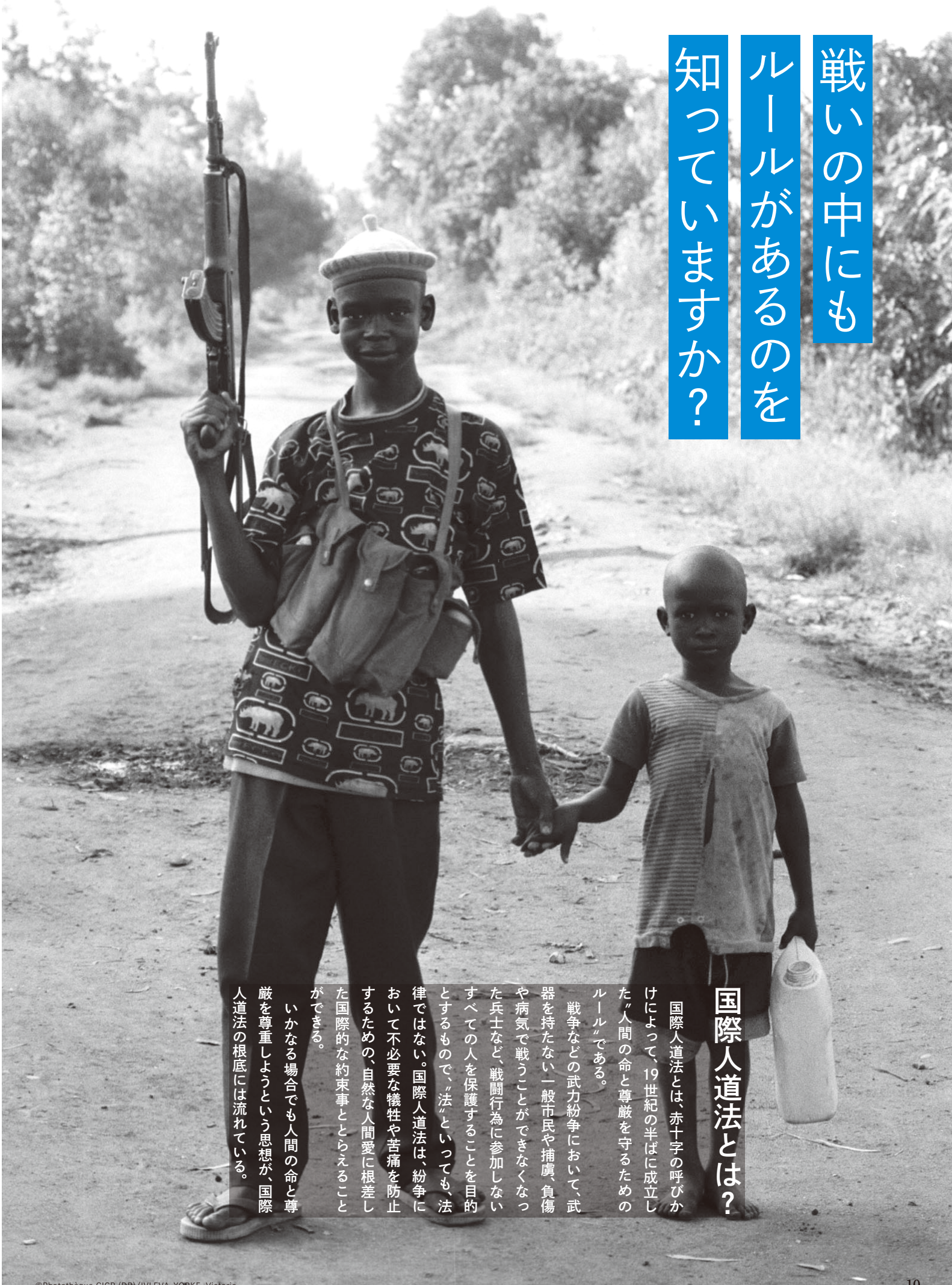
せたい」と意見を出したのも生徒たちだった。市の危機管理室の許可を得て、生徒たちは自分たちの手で防災倉庫を校舎4階に移動させた。

「楽しみながら取り組み、地域の方々と触れ合うなかで生徒たちには自信が生まれました。今では表現力のある子どもたちが増えましたし、学力も向上しています。かつてのマイナスイメージは消え、活気ある開かれた学校へと変化しています」。

'12年8月には、校舎1階の空き教室を活用し、県内企業の防災関連製品を集めた「防災展示館」を開設。防災グッズを紹介したり、生徒たちの作成した防災パネルを展示する。学校を起点として、行政や企業とも協力しながら地域と一体となった防災活動を展開している。

るんです。生徒たちにとっては、地域の方々とコミュニケーションを取るよい機会にもなっています」。地域に貢献するとともに、生徒や職員の防災に対する危機管理意識の向上に役立っている。

戦いの中にも ルールがあるのを 知っていますか？



国際人道法とは？

国際人道法とは、赤十字の呼びかけによって、19世紀の半ばに成立した「人間の命と尊厳を守るためのルール」である。

戦争などの武力紛争において、武器を持たない一般市民や捕虜、負傷や病気で戦うことができなくなった兵士など、戦闘行為に参加しないすべての人を保護することを目的とするもので、「法」といっても、法律ではない。国際人道法は、紛争において不必要な犠牲や苦痛を防止するための、自然な人間愛に根差した国際的な約束事ととらえることができる。

いかなる場合でも人間の命と尊厳を尊重しようという思想が、国際人道法の根底には流れている。

国際人道法は なぜ必要なのか

世界各地で絶え間なく続く紛争・戦争の現場では、人間の尊厳を脅かす様々な問題が起きている。そのひとつに子ども兵士の問題が挙げられる。今日、世界では25万人以上の子どもが武力紛争に加わっており、10歳に満たない少年少女も兵士となり大人とともに戦っている現実がある。強制的な徴兵や、誘拐によって兵士にされる子どもたちが後を絶たない。その一方で、自らの意思で兵士になる子どもも存在する。社会格差や養育者の不在、教育の欠如が子どもたちを人隊へと追い立てている。

武器を持った子どもたちは、人を殺すこととさえある。人を傷つけば、子どもであれ加害者だ。しかし、武器を持たねばならなかった彼らは、同時に犠牲者でもある。子どもが人を殺さねばならない状況に、人間の尊厳はあるだろうか。国際人道法では、15歳未満の子どもを兵士として利用することを禁じている。国際人道法を学ぶことによって、世界の現実を知ることが、現代の日本社会においても不可欠なのである。

平和な日本で 今、国際人道法を 学ぶ意義

「国際人道法は戦争や武力紛争における無用な苦痛や破壊を予防し、人間の命と尊厳を尊重するためのもの」と聞くと、平和

教室でのあなたは人道的？ それとも……？ “思いやり力”をチェック！

- | | |
|--|--|
| <p>① けんかで負けを認めた相手に、とどめの一撃を加えてもいい
☐ YES ☐ NO</p> | <p>② けんかで相手がケガしても、相手にだって悪いところがあるので、保健室に連れて行かずに放っておいてもいい
☐ YES ☐ NO</p> |
| <p>③ 負けたほうは、隙を狙って相手に仕返してもいい
☐ YES ☐ NO</p> | <p>④ けんかのはずみで、教室の窓ガラスを割っても仕方がない
☐ YES ☐ NO</p> |
| <p>⑤ けんかで相手に勝つためなら、教室にあるどんなものでも使ってもいい
☐ YES ☐ NO</p> | <p>こたえ：
(当たり前ですが) すべてNO。それぞれなぜNOなのか、理由も分かりますか？</p> |

詳しい解説は、日本赤十字社ホームページ「資料で見る青少年赤十字」に掲載した、「国際人道法を知っていますか？(学校生活編)」をご確認ください。
<http://www.jrc.or.jp/youth/siryo/index.html>

プログラムを活用して 見られた生徒の変化

日本赤十字社では、青少年を対象とした国際人道法の普及を推進するため、「国際人道法学習プログラム」の充実を図ってきました。本プログラムを活用して、5年間にわたって国際人道法の学習に取り組んできた広島市立吉島中学校の田村真一先生に、その効果を聞きました。

「生徒たちの言葉の端々に、人道的な観点、つまりヒューマニティを感じられるようになったときに、このプログラムの効果を感じました。ある生徒はいじめの根絶を公約として、生徒会役員に立候補しました。国際人道法は自分の公約の後盾になる、とその生徒は感じたそうです。プログラムには、生徒が持つ“思いやる力”を引き出す手がかりが随所にちりばめられています。いわゆる“正解”が存在しないため、生徒が各テーマについて熟考し、議論を重ね、そこに指導者も同じ視点で加わるのが魅力です。常に人道的な観点から自らにできることを探ろうとする姿勢を、生徒たちはプログラムを通して身に付けています。」



国際人道法学習プログラム
『誰もが人間らしく生きるために』
(指導者向けテキスト)

1円玉募金による 教育等支援事業

アジアの子どもたちとともに

教育等支援事業とは、日本の青少年赤十字メンバーが集めた“1円玉募金”を活用して実施している、青少年を対象とする支援事業である。3か年をひとつの事業期間として定め、バングラデシュ、モンゴル、ネパールの3か国に対して2003年度から継続して支援を行っている。

バングラデシュ Bangladesh



保健室「ファースト・ エイド・ルーム」を設置

バングラデシュは人口1億5240万人、イスラム教徒が9割を占めるインド洋に面する国である。主要産業は衣料品、縫製品産業。12年度は欧州経済危機の影響を受けながらも6.3%の経済成長率を達成し、かしながら国家財政は慢性的な赤字となっている。

バングラデシュでは保健室がなく、保健師も常駐していない学校がほとんど。生徒が学校内でけがをしても、応急手当を受けられるまでに時間がかかってしまうという現状がある。

そこで、教育等支援事業では3年間で150校の学校に保健室「ファースト・エイド・ルーム」を設置し、救急法や保健衛生環

境改善などの研修を現地指導者やメンバーらに対して実施している。また、トイレや花壇の整備、救急箱や文具セットも配布した。保健室が開設された学校では、救急法の研修を受けたメンバーが管理運営を行っている。ひとつの学校に救急法を身に付けたメンバーが約10人おり、軽いけが程度であれば止血や消毒といった応急手当を素早くできるようになった。

バングラデシュ南部にあるポリシヤル管区のルパタリジャグヤ中学校に通い、救急法を学んで活動しているホセくんは、2012年の一年間で8人の手当を担当したという。「先月も、女の子が耳を少し切っ

てしまい、出血していたのですぐに手当をしました」と報告してくれた。

ホセくんら救急法を知るメンバーは、まだ知らないほかの生徒にもその方法を伝え、「健康・安全」の考えを広める研修会を開く活動も行っている。

文房具セットの配布で 出席率増加

教育等支援事業では、貧しくて文房具を買えず、十分な勉強ができないメンバーのため、各校100名分ずつ文具セットを配布している。文具セットは、鉛筆、消しゴム、ノート、色鉛筆をバッグに詰め込んだもの。このセットを受け取った生徒は出席率が上がったと報告されている。モチベーションが向上した結果、退学してしまう児童や生徒の数も減少した。



International Friendship Project

モンゴル Mongolia



トイレを改修・設置し 衛生環境を改善

日本の約4倍の国土に、人口およそ280万人が暮らすモンゴル。インフラおよび衛生環境の整備はいまだ不十分で、貧困レベルも高い。『ゾド』と呼ばれる雪害をはじめ、洪水、竜巻、草原火災などの災害が起きやすい環境にあり、それによって住居や家畜を失う遊牧民も多い。モンゴルでは、手洗いなど保健衛生に関する知識があまり普及していないため、水が原因となる病気が大きな課題となっている。

学校では、生徒数に対してトイレや手洗い場が圧倒的に少ない。また、壁がなかったり、男女兼用だったり、決して衛生的な環境とは言えないのが現状である。そこで、教育等支援事業では、トイレの改修や新設を行い、便器や仕切りを設けたほか、ハンドドライヤーを設置し洗い場の改修も行った。以前は女子数人で連れ立って行く必要があった男女兼用トイレに仕切りやドアができたことで、女子ひとりでも行けるようになった。

「ピア・エドゥケーター」 の育成

同世代の若者が保健衛生をはじめ救急法などの知識とともに学び、仲間伝えていく啓発活動「ピア・エドゥケーション」にも積極的に取り組んでいる。プログラムを受講しピア・エドゥケーターとなった生徒たちは、学校内での衛生普及活動だけでなく、地域の老人ホームや障がい者福祉施設等で清掃活動なども行っている。以前は福祉活動には消極的だった生徒もピア・エドゥケーターになったことで、健康的・衛生的な環境を作るためにはどうするかを積極的に考えるようになったと、好ましい変化が報告されている。

また、世界各国のJRCメンバーの活動推進のため、ウランバートル市ナライハ地区にユースキャンプを建設中だ。日本とモンゴルとの友好関係のシンボルとして、13年の完成を目指している。

ネパール Nepal



トイレなど 衛生設備を設置

ネパールの人口は3100万人、国土は北海道の約18倍の147万km²の広さである。国家開発計画の一環として教育に力が入れられており、小学校教育は無料、教科書は5年生まで無料配布されている。

ネパールでは、現在でも家や学校にトイレがなく、野外で排便せざるを得ない状況がある。また、トイレがあってもトイレレットペーパーや手洗い場がない場合も多い。ネパールには、伝統的に右手を直接用いて食事をする習慣があるため、不衛生な環境が原因で下痢や感染症などが起こり、年間2005000人の子どもの命を失っている。道路わきや路地に様々なゴミが投棄されていることから、衛生観念が十分に浸透していないことがわかる。

教育等支援事業では、保健衛生の普及活動を急務とし、トイレや手洗い場など衛生設備の普及や、石鹸を使った手洗いの励行、環境美化の促進に取り組んでいる。

保健衛生の普及活動により、すでに1200の村で野外排便の根絶が達成された。また、石鹸を使った手洗いの必要性が理解されたうえで実践され、下痢が減少しているという報告もあった。



JRCメンバーが 地域の変化を促す

教育等支援事業では、現地のJRCメンバーによる保健衛生の啓発活動も支援している。ジャワラ・デヴィ小学校のJRCメンバーは救急法を習得し、軽傷程度なら対応できる態勢を整えている。地域住民が学校で応急手当を受けられることを頼り、軽いけがを負ったときに手当を受けに来校することもあるという。JRCメンバーは地域の保健衛生に関する行動の変革に中心的な役割を果たしており、住民も、彼らを「変化の担い手」として肯定的に受け入れている。



いったことを話し合うとともに、
掲示用のポスターを作成した。
また、参加者は母国や地元を
戻ってから自分に何ができるかを
考え、自分自身にあてて手紙を書
いた。大阪府から参加したメン
バーは「ひとりひとりの考え方や
生き方を理解し、人を尊重し尊敬
することの大切さを改めて実感し
ました」と語った。
アジア・太平洋地域のJRC事
業の理解を深めるため、国別に設
けられたブースで、自国の赤十字・
赤新月の活動を互いに紹介した。
民族衣装を着てアピールするな
ど、どのブースもそれぞれ工夫が
凝らされて大盛況。日本からは福

鳥島のメンバーが東日本大震災の
被災者支援について紹介した。紹
介に立ったメンバーは「たくさん
の方から反応があり、国内外を問
わず福島県に対する関心が高いこ
とが実感できました」と語った。



新しく出会った友達と
強いつながりを
築くことができました。
これからも
連絡を取り合います。



海外メンバーはフェアウェル・
パーティーに参加。日本赤十字社
からメンバーそれぞれに修了証が
手渡された。約2週間のプログラ
ムを終え、翌28日、海外メンバーは
それぞれ帰路に着き、国際交流事
業は無事終了した。

11月27日

11月26日

国際交流集会の閉会式開催。ス
リランカから参加したメンバ
ーは「地球に住む人はみな家族で
す。この大きな家族が幸福で平和
に暮らせる世界を、次世代を担う
私たち若者の手でつくっていき
ましょう」と述べ、世界規模の友
情と協力の必要性を呼びかけた。
参加者は各々がリーダーシップ
を発揮して実り多き交流会と
なった。国内外の仲間とのさらに
強い協力関係を築くためのまた
ない機会となった。



11月23～26日

静岡県御殿場市にあるYMCA
東山荘にて、国際交流集会を開催。
参加者は総勢197名。日本のJ
RCメンバーは75名が参加した。
国や地域を超えた相互理解を育
み、赤十字の人的価値について
学ぶことを目的とし、グループ
ディスカッションやJRCの活動
紹介を行った。
国際交流集会のなめはグルー
プディスカッション。「人間の尊
厳」について考えるプログラムを、
赤十字国際委員会（ICRC）のシ
ン・シユクディブ氏が講師となり
実施した。
国内外のメンバーは15のグルー
プに分かれ、「人間の尊厳がもつと
も危険にさらされているのはどの
ような状況か」「人間の尊厳を守る
ために青少年は何ができるか」と

世界のJRCメンバーと 国際交流

青少年赤十字の国際交流事業は、1970年から継続して行われているプログラムで
ある。赤十字の人的価値観に触れて、青少年赤十字活動の活性化と、将来の
赤十字運動を推進する人材の育成を目標とする。今回はアジア・太平洋地域の青少
年に触れ合い、切磋琢磨することで国境を越えた友情を育んだ。

11月15日

日本赤十字社本社にて、青少年
赤十字国際交流事業の開会式が行
われた。近衛忠輝日本赤十字社社
長から歓迎のあいさつがあったあ
と、メンバーが持ち寄った記念品
が手渡された。午後にはオリエン
テーションが行われ、日本赤十字
社の事業紹介と社内見学などを
行った。



2012年11月15～27日、アジア・太平
洋地域の21の国と地域から、41名の海外メ
ンバーと5名のJRC海外スタッフが来
日した。メンバーは、アジア・太平洋地域が
直面する災害、紛争、貧困、衛生、教育などの
問題について意見を交換し、問題への理解
を深めた。

11月16～22日

支部研修プログラムに参加。
日本全国の20都道府県支部を訪
問した。各訪問先では日本の青少
年赤十字メンバーと交流。日本の
学校での授業を体験したり、着物
の着付けや神社を参拝するなど
し、日本文化を体験した。
静岡県支部では、マレーシアの
メンバーが「献血ルームあおば」を
訪問。実際に受付や問診、血圧測定
を体験し、採血室を見学した。
大阪府支部では、ブルネイのメ
ンバー2名と海外スタッフ2名が
JRC加盟校で茶道と少林拳法
を体験したほか、救急法の講習を
受講した。
交流を通じて、参加者はJRC
の実践目標のひとつである国際理
解・親善を体験するとともに、広く
世界の仲間を知り、仲良く助け合
う精神を養った。



ブルネイにも三角巾での
止血法がありますが、
日本と少しやり方が違う。
違いがわかって
面白かったです。



Interview 野口聡一

宇宙飛行士

新しい世界に飛び出そうとすることは、人間にとって本能的な欲求だと語る野口聡一さん。
宇宙飛行士の視点で考える“冒険”と“危険”のバランスとは。

どんな子どもにも“冒険したい” 気持ちが備わっている

「学校の勉強よりも、遊ぶことがとにかく好きな子どもでした。休みになれば山や海など自然の中に出かけていき、思う存分体を動かしていました」。

宇宙飛行士として活躍する野口聡一さんは少年時代をそう振り返る。高校一年生の時にスペースシャトルの打ち上げの様子を見て憧れ、その後は夢に向かって真つすぐ進んだ。'05年にスペースシャトルディスカバリー号で宇宙へ。続く'09年には国際宇宙ステーションに百六十一日間にわたって長期滞在し、ロボットアームの取り付けなど、様々なミッションをこなした。来るべき今後のフライトに向けて、現在も訓練に取り組む日々を送っている。

“外の世界を知りたい” という好奇心から 成長は始まる

「宇宙がどんなところなのか、この目で確かめてみたい。思春期に芽生えたその気持ちは打ち消しがたいものでした。もともと僕は人一倍好奇心が旺盛な方でしたが、『外の世界を知りたい』という気持ちは、どんな子どもにも備わっているのだと思います」。

新しい地平にたどり着きたいという欲求は、生き物として、人間に本能的に備わっているもののはずだ、と野口さんは言う。そのことは、地球に誕生した生命の歴史が物語っている。

「命ははじめ海で生まれ、次第に陸へと広がっていった。初めて海の底から陸へ上がったいきものは、海の

中にさえいれば安全で幸せだったはずなのに、『ここから一步、外に出てみたい』と思ったのでしょうか。人間も同じです。空を海と見立てれば、私たちが今暮らしている地上は空気という海の底にある。ここにいけば何もかもが揃っていて安全なのですが、それでもなお人間は宇宙という新しい世界に惹かれ、少しずつ殻を破って地球から出ていこうとしています。これは本能のようなもの。冒険し、活動範囲を広げていきたいという欲求は、生命に刻み込まれているのだと思います」。

自分の生まれ育った町の外にはどんな景色が広がっているのか。山の向こうには何があり、海の向こうにはどんな人が住んでいるのか。そんな素朴で素直な疑問から、子どもの成長は始まる。子どもたちの興味を育てながら、学びを助けていくのが大人の役目でもある。

「僕は小学校2年生から、ボーイスカウトに加入していたんです。森や山、川など自然豊かな場所でハイキングやキャンプなどをして、遊びながら学びます。野外での料理の仕方を覚えたり、ちよつとやさそつとではほどけないロープのくくり方を習ったり。机上の勉強では知りえないことを、野外活動を通して教わりました。また、なにより、外の世界には多くの危険があるということ、そしてその危険には正しく対処すれば向き合っていける



のだと思います」。

のだということを学びました。このことは、その後の僕の人生にも少なからぬ影響を与えていると思います」。

危険を必要以上に回避させる教育ではなく、危険を認識させ、そこから問題解決の方法を探る教育は、子どもの成長を助けると野口さんはいう。

「けがをしたっていいから遊んで学びなさい、と言えたらいいのですが、なかなかそれも難しい。かといって、危険回避を優先しすぎるあまり活動を制限してしまうのはもったいないことです。安全が保障されたところでは、冒険などできないのですから。たとえば、船は港にいたときに一番安全ですが、だからといって港にずっと停泊していたのでは目的を果たせませんよね。大海に出れば嵐に遭遇することもある。大波にさらわれて沈没する可能性もある。けれども、それが怖いからといって、海を渡らなければ船としての役目をまっとうできません。僕たち人間もこの点は全く同じだと思います。どんなことであれ、何かを実行するときには必ず何らかの危険を冒さなければならぬのです。大切なのは、危険への対処の仕方を知ること。そうやって人は大人になっていくものだと思います」。

宇宙飛行士という “危険”な仕事

言わずがな、宇宙へ飛び立つのは命がけの仕事だ。宇宙飛行士は常日頃からさまざまな訓練を積み、それはあらゆるリスクを想定して、万全の態勢で

狂いがちなこの環境のなかで、地上と同じ二十四時間サイクルを自分で作り出す、という訓練です。国際宇宙ステーションでのミッションも体を環境に慣れさせるまでが大変なのですが、洞窟での訓練はその理解と適応力の養成に役立ちます」。

訓練を繰り返し、 不安に克った

宇宙に飛び立つまで、紆余曲折がなかったわけではない。初の宇宙飛行が決まっていた'03年、スペースシャトルコロンビア号がテキサス上空で空中分解し、七名の宇宙飛行士が命を落とすという大事故が起きた。この一件で宇宙飛行の訓練はすべて中止さ

れ、決まっていたフライトの予定も白紙に戻った。「宇宙に行きたい一心で突き進んできていたから、その時は頭が真っ白になりましたよ。先が見えなくなった気がして、本当に宇宙に行けるんだろうかと不安にもなりました」。

無力感を打ち消すためにしたのは、ひたすら訓練を続けることだった。野口さんが初フライトまでにクルーとともに行った訓練の累計時間は、なんと三万八千九十九時間。水中訓練は七十五回にも及んだという。

「同じことの繰り返しは決して楽しくはありません。しかし訓練は不安を克服するのにもつとも役立ちました。訓練をすればするほど体は作業を覚えていくし、効率も高まり、確実になっていきます。だから、繰り返しは決して無意味ではないんです」。

野口 聡一

Noguchi Soichi

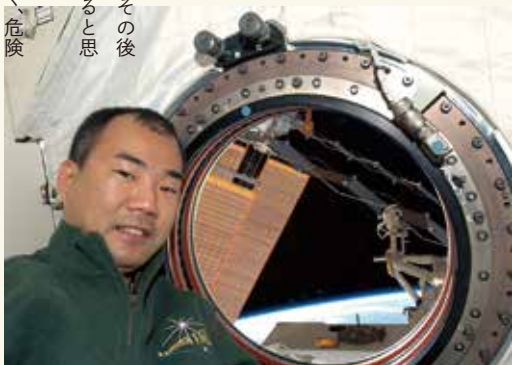
1965年、神奈川県生まれ。宇宙飛行士。東京大学非常勤講師。1991年東京大学大学院修士課程修了、石川島播磨重工業株式会社(現株式会社IHI)に入社。1996年、NASDA(現JAXA)の宇宙飛行士候補者に選定される。2005年、STS-114のクルーとして宇宙飛行、船外活動主担当として活躍。2009年12月から2010年6月まで国際宇宙ステーションに滞在した。



『15歳の寺子屋 宇宙少年』

野口聡一著
(講談社/1,050円)

15歳のときに抱いた「宇宙に行きたい」という夢を現実にした野口さん。悩みや不安を乗り越えるコツは?夢を叶えるためにはどうしたらいい?精一杯生きるためのヒントを詰め込んだ一冊。



©NASA



Fuku

啓新高等学校

稲木 穰 先生

本校ではJRCの活動は全校生徒で行っています。日々の活動内容をクラス担任から伝えられ、希望者が集まる形です。ときには野球部全員で地域の福祉施設を訪問するなど、部単位での参加もしています。

地域とのかかわりを大切にするため、福祉施設訪問活動は積

今、子どもに読んでほしい本



『日本辺境論』

内田樹著
(新潮社/777円)

「日本人とは何ものか」という問いに対し、様々なテーマを扱い論じる。「自分の国を考えるきっかけになる。海外に目を向ける前にチャレンジしてみしてほしい」(稲木先生)。

極的に行っています。生徒たちは自らプレゼントを用意して施設のクリスマスパーティーに参加しました。校外活動以外では、2～3年生が運営者となり、1年生に赤十字の活動についてレクチャーする講習会「校内トレセン」も行っています。

全校生徒で行う日々のJRC活動が成長を促す

JRCの活動を通し、生徒は注意深さを身に付けたほか、自分で「気づき・考え・実行する」姿勢でクラス運営を行うようになりました。意識してみれば献血ルームや病院など、街中で赤十字のマークを見かけます。赤十字が身近なものだということを、生徒たちも理解し始めています。

今、子どもに読んでほしい本



『がんばれ!!小さき生命たちよ』

村田修一、村田絵美著 豊島勝昭監修
(TBSサービス/1,470円)

新生児医療を取り巻く厳しい現実を当事者の視点で描くノンフィクション。「読売巨人軍村田選手の実体験。事実を通して命の大切さを感じてほしい」(佐塚校長)。

組んでいます。また、隣接する小学校とは日常的な交流や共同学習にも取り組んでいます。6年間にわたって交流を積み重ねることで、子どもたちは誰とでも自然な人間関係づくりができるように成長します。

障がいのある子どもたちと触れ合いながら成長を果たす

JRCの活動を通して、児童生徒は世界や周りの人のことについて意識や関心を高めるきっかけを得ます。子どもの気づきは親へも影響を与えます。わが子から学校や活動の話聞けば、親の意識までもが変わっていくからです。学校からの発信で、周囲の地域社会まで変化していきます。JRCの活動は、住みやすく温かい、誰もが生き生きとした生活ができる地域づくりにつながっていくのだと感じています。



Kanagawa

横浜市中村特別支援学校

佐塚 丈彦 校長

本校は、肢体不自由と知的障がいのある重度重複の特別支援学校です。医療的ケアを必要とする子どもも多く通っています。本校に通う69名の子どもたちも、社会のために何かできないかと考え、家庭の協力を得ながら、ペットボトルのキャップの収集に取り

Junior Red Cross

日本縦断!活動紹介

全国のJRC加盟校の最新の活動情報をお届け。今回は、6地域を代表して6校の先生方にインタビューした。生徒たちの気づきを促し、考える力と実行力を伸ばすため、各校で独自の取り組みがなされている。



Hokkaido

根室市立北斗小学校

龍本 英紀 先生

祖父母へ“防犯レター”を書いて、思いやる力を育てる

根室市立北斗小学校は、本年度よりJRCに加盟しました。JRCの活動を導入してみて、心配りや思いやりの心を引き出す効果が期待できそうだと感じています。児童たちの様子をみていると、相手を思う気持ちが言葉にも表れるようになってきています。3年生の国語の授業で、祖父母にあてて、振り込め詐欺への注

今、子どもに読んでほしい本



『いのちのまつり「ヌチヌグスージ」』

草場一壽著 平安座資尚絵
(サンマーク出版/1,575円)

命の大切さを視覚を通して感じさせてくれる仕掛け絵本。「自分の命が先祖から代々引き継がれてきたものだということを、読み手に考えさせてくれる本」(龍本先生)。

意をうながす内容の“防犯レター”を書く、という取り組みを立ち上げました。これは、「手紙の書き方」の授業にJRCの態度目標である「気づき・考え・実行する」を連動させ、防犯施策ともからめた試みです。根室警察署にも協力を仰ぎ、署の職員を教室にお招きし、振り込め詐欺について児童に説明してもらいました。

児童たちは手紙の書き方を学びながら、高齢者を気遣う気持ちも育みました。このような経験を重ねることで、目的意識をもって取り組む姿勢が身に付けば、と思っています。

JRC活動に取り組む児童を見守る中で、指導者側も児童の繊細な成長や変化に気づける細やかさを身に付けることができると思っています。





Okinawa

座間味村立 阿嘉幼小中学校

わく がわ ひとし
湧川 仁 先生

島全体で子どもたちを見守る 環境づくり

本校は幼小中一貫教育を行うへき地離島校で、生徒数は21名です。「地域に根差し、地域から信頼され開かれた学校づくり」を目標とし、ひとりひとりの子どもたちを大切にしたい学習指導や、地域の環境を生かした体験活動を行っています。

遠足や水泳教室で海へ行くとときは、ビーチの清掃も行いま



今、子どもに読んでほしい本



『100万回生きたねこ』

佐野洋子著
(講談社/1,470円)

100万回生まれ変わったトラねこが、初めて他者を愛したとき…。読み継がれるベストセラー絵本。「生きる意味について、深く考えさせてくれます」(湧川先生)。

す。特別な意識でしているわけではなく、自然とゴミを拾っています。清掃活動が子どもたちの日常にすっかり根付いている証拠でしょう。

学校の前に島の人々を見守ってくれている大きなウドン(御殿)の木があります。活動の一つとして、この木の前にベンチを置きました。畑仕事や散歩の途中で、地域のお年寄りが座って休めるようにするためです。地域との連携が大切だと考えているので、運動会や学習発表会の前には子どもたち一人ひとりがメッセージを書いた案内状を近隣のお年寄りへ送ります。みなさん、子どもたちのことを孫のように温かく見守ってくれ、運動会では多くの声援をかけてくださいました。こういった活動を通して、地域のお年寄りとの交流の機会を増やすことができました。

島全体で子どもを見守る環境づくりをこれからも続けていきたいと考えています。

今、子どもに読んでほしい本



『五体不満足』

乙武洋匡著
(講談社/1,680円)

先天性四肢欠損症の著者による半生の記録。「クラスメイトや家族が乙武さんをサポートする姿から、障がいがある人のことを理解し、思いやる大切さを学べます」(和田先生)。

ちの態度を変化させています。気づきのきっかけが増え、積極的に小さなV・Sに取り組んで帰りの会で共有することで、お互いを認め合えるようになりました。

児童たちの自主性を育む小さな活動の 積み重ね

大阪府支部の主催する研修会に参加し、赤十字について学ぶ児童もあり、リーダーとしての意識が芽生えています。児童たちはひとりひとりが「今、自分たちに何ができるのか」を考え行動しているのが感じられます。

JRC活動を取り入れて以来、児童を注意する指導から自主性を促す指導へと教員の側にも変化が生まれました。保護者や地域へ向けての活動も、今後活発にしていきたいと考えています。



Osaka

阪南市立 波太小学校

わだ たけし
和田武史 先生

今必要とされることを自分から進んで行うように、児童たちにはボランティア・サービス(V・S)の意識を高めるよう指導しています。たとえば、「靴をそろえる」といったとても些細なことから始めているのですが、こういった“小さなV・S”の積み重ねが児童た

今、子どもに読んでほしい本



『バッテリー』

あさのあつき著
(角川書店/540円)

中学一年生のバッテリー、巧と豪が主人公。「ひたむきさ、一途さ、孤独が痛いほど感じられる。若い気持ちが清新で、読み進めるうちにはまってしまいます」(濱本先生)。

た活動をしています。また、生徒会執行部を中心に地域のボランティア活動にも参加しています。今年度も、昨年度に引き続いて地域の河川清掃に参加する予定です。

赤十字の世界性に興味を示す生徒たち

本校はJRC加盟2年目で、生徒や保護者への浸透度はまだ十分とは言えないのですが、赤十字の世界性に興味を持つ生徒も次第に出てくるなど、頼もしい変化が訪れています。また、本校は来年度から広島県で初の中等教育学校へ移行します。これを機会にJRCの活動をさらに深めていければと思っています。

赤十字の理念は人類の普遍的な願いに基づいた活動です。“当たり前の素晴らしさ”を多くの生徒たちに知ってほしいと思います。



Hiroshima

広島市立安佐北 中学校・高等学校

はまもと たかし
濱本貴司 先生

中高一貫校である本校は、文化祭では高校生による模擬店やライブステージなどがあり、地域の方々も多く来校していただきます。中学校では、生徒や保護者に物品を提供してもらってバザーを開催し、収益金は赤十字を通じて海外支援金として送るといっ

Operation Vista Reunion



2012



1962

50年ぶりの再会

「12年8月25日から28日にかけて、『Operation Vista』プログラム50周年記念同窓会」が行われました。『Operation Vista』は'62年にアメリカ赤十字社が主催した国際交流プログラムです。世界42か国から112名の青少年赤十字のメンバーがアメリカに集まり、約一か月かけて各地にホームステイしました。今回の同窓会には、34名が参加。日本からは、50年前にプログラムに参加した4名がひとりも欠けることなく出席し、旧交を温めました。

ホワイトハウス、NASAのゴダードスペースセンターなど、50年前にも訪れた場所を再び見学。ニューヨークでは国連本部ビルにも足を運びました。現在の国連事務総長である潘基文氏も『Operation Vista』の参加者。当時の経験が外交官を志すきっかけになったそうです。「これまで何千ものスピーチをしてきたけれど、今日のようないきなり言葉が出ない」と挨拶されたのが印象的でした。

「50年前、涙して別れたオランダのメンバーと再会し、懐かしさのあまり抱き合っていました」と、参加者の生駒さん。青少年赤十字の友情は、これからも絶えることなく続いていきます。

Junior Red Cross Information

2013.9.1 No.162
青少年赤十字指導情報

編集後記

全国の青少年赤十字指導者の皆様のご要望をうけ、青少年赤十字を巡る最新の動向を広くお伝えするため、『青少年赤十字指導情報』は2年ぶりに復刊しました。あの震災から2年半がたった今、特集「東日本大震災後の防災・減災教育」から、私たちが実行すべきことは何かを考える具体的なヒントを見出していれば幸いです。また、初めて青少年赤十字に出会う方でもふと手にとりたくなる誌面を目指して、デザイン・レイアウトなどを前号から全面的にリニューアルしました。ページをめくる度に飛び出す全国のメンバーの笑顔とともに、今後のご指導にお役立てください。刊行にご協力いただいた全ての方々へ、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

COVER-2: Miyazaki

宮崎県延岡市
学校法人純心学園 東幼稚園
藤田博先生、内田陽菜さん

「たとえ大変な時があっても、真剣に向き合って乗り越えるからこそ、人は成長し感動できるんです」と業務主任の藤田博先生はいいます。先生方に温かく見守られながら、内田陽菜さんたち東幼稚園の園児のみなさんは、澄み渡った延岡の青空の下で今日も元気いっぱい園庭を駆け回ります。



青少年赤十字(JRC)とは

子どもたちの「気づき」をきっかけに

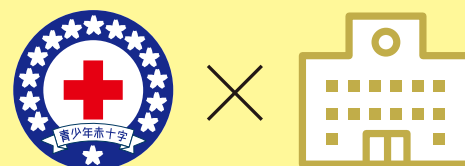
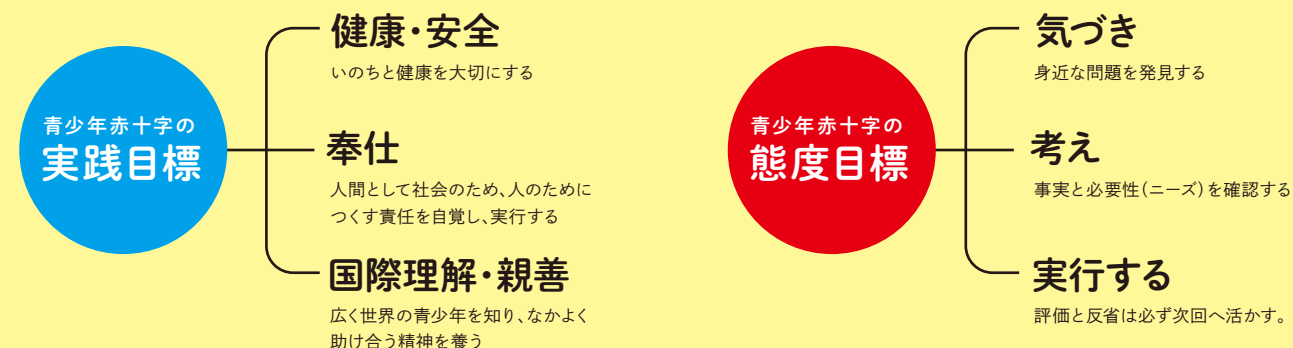
第一次世界大戦の時、カナダ、アメリカ、オーストラリア、イタリアの学校の生徒と先生は、戦場の兵士やその家族、傷病者など、戦争で苦しむヨーロッパの人々をなぐさめ励ますため、手紙やプレゼントなどを赤十字を通じて届けました。

これがきっかけとなり、青少年赤十字が誕生しました。

世界に広がる青少年赤十字

赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できる人間に成長してほしいという願いから、赤十字社連盟(現 国際赤十字・赤新月社連盟)は1922年に青少年赤十字をつくることを決めました。

日本の青少年赤十字は、1922年に滋賀県の守山尋常高等小学校(現 守山市立守山小学校)に誕生した「少年赤十字」から数えて90年以上の長い歴史をもっています。



赤十字を教材に、「生きる力」を育てる

青少年赤十字の活動は、子どもたちの思考力・判断力・表現力を養うとともに、コミュニケーション能力や言語活動の充実を期待できます。赤十字には、人間のいのちと健康、尊厳を守るために世界中で活動する中で得た経験やネットワークなどがあります。赤十字そのものを「教材」として、存分にご活用ください。

加盟校数

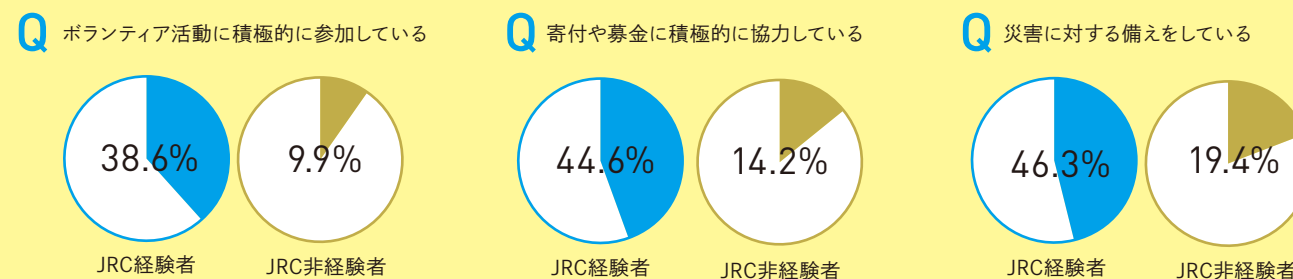
1万3,194校

メンバー数

303万2,526人

平成25年3月現在

JRC経験者は、非経験者よりも周囲や社会に目を向ける傾向が強くなっています。



調査結果の詳細は次のアドレスをご参照ください。http://www.jrc.or.jp/youth/t3/t4/Vcms4_00002552.html

加盟登録のことや、各種教材の貸出、講師の派遣などに関する詳しい情報をご希望の場合は、次のアドレスから最寄りの日本赤十字社各都道府県支部にお問い合わせください。

<http://www.jrc.or.jp/youth/join/index.html>